



キラリ通信

平成28年2月25日 第7号

朴センター長受賞

毎日新聞・韓国朝鮮日報主催の「第21回日韓国際環境賞」

朴恵淑センター長は、毎日新聞・韓国朝鮮日報主催の「第21回日韓国際環境賞」を受賞しました。

10月29日に東京のホテル椿山荘東京において行われた表彰式には、柳興洙(ユ・フンス)駐日韓国大使、関荘一郎環境事務次官、両国の外務省幹部なども列席して盛大に行われました。亀山市からは、西口昌利環境産業部長とセンター職員が列席いたしました。

「第21回日韓国際環境賞」受賞挨拶の抜粋

この度は、私の環境研究及び環境活動に対して、栄誉ある日韓国際環境賞を頂き、大変光栄に存じます。

環境問題には、国境、民族、宗教、性別、世代間など、いかなる差別も存在せず、自然と人間との良好なバランスからなる、持続可能な社会を創る姿勢のみが解決の糸口となると思います。

私の環境研究や活動の基となっているのは、日本の4大公害、特に、大気汚染によって生態系が破壊され、多くの犠牲者を出した四日市公害であります。2000年から四日市公害から学ぶ「四日市学」を構築して、その発生メカニズムを究明し、生態系への影響を把握し、有効な環境政策は何だったのかを、人文社会科学的及び自然科学的、医学的側面を網羅する総合環境学的研究を行ってきました。半世紀前に発生した四日市公害問題は、いまだに四日市ぜんそく患者が存在し、豊かな自然はいまだ戻っていない現状があります。しかし、今年3月には、四日市公害を風化させない、次世代を担う子どもたちへ四日市公害の教訓を伝えるための「四日市公害と環境未来館」がオープンしました。四日市公害の発生から半世紀の時間を経て、世界一の環境先進都市を目指す四日市市の未来に向けたプラットフォームができました。私たちの活動は、このプラットフォームを積極的に活用し、ユネスコが推進している持続可能な開発のための教育(ESD)の発展的展開のために、さらなる努力を致します。



亀山市総合環境研究センター長
三重大学人文学部・地域イノベーション学研究所教授 朴 恵淑
(ぱく けいしゅく)

日韓国際環境賞」は、日韓国交正常化30周年に当たる1995年、毎日新聞社と朝鮮日報社が、東アジア地域の経済発展と環境保全の調和を図るため「日韓(韓日)国際環境賞」を共同で創設し、平成27年で第21回目となります。毎年、主催地を東京とソウルの交代で行われますが、21回目の平成27年は東京で行われました。

今月号の内容

1 ページ

朴センター長受賞

2 ページ

「亀山学」発刊

●3～4 ページは、キラリ市民記者取材記事

「亀山学」出版

亀山市総合環境研究センターは、平成17年1月に設立された機関で、時代を先取る有効な環境政策や健康政策の立案を提案し、自治体と企業・住民が実践できる戦略を練る実践型シンクタンクとして、自治体と市民・企業・大学との産官学民の連携により、地域のニーズに対応する研究センターです。日本の自治体の中でも注目されている亀山市の総合的・有機的な環境政策のバックボーンを作る有効なルーツとして「亀山学」を創設し、環境と防災・文化・健康と福祉のトップランナーとしての亀山市を目指しています。具体的には(1)環境教育の拠点としての活動(2)啓発・情報発信・人材バンクとしての活動(3)事業者との連携活動(4)地域連携・国際交流活動(5)亀山市のシンクタンクとしての活動を行っております。

櫻井義之市長の要請により、この度、10年間積み上げてきた地域学としての「亀山学」を発刊する運びとなりました。朴恵淑センター長編著により、第1章から第8章の240ページ、A5判上製で、いまなぜ「亀山学」が必要なのかが分かりやすく書かれています。著者は、櫻井義之市長をはじめ、朴恵淑センター長、センター研究員の方々等、多彩であり、亀山の過去、現在、未来を知って学べる内容となっております。

亀山市の皆様が、亀山の歴史や文化などの身近な環境を再度、見つめ直し、さらに学び、未来志向の亀山市を構築するターニングポイントとなることに期待を込めております。皆様方が、手に取ってご覧になることを心より願っております。発刊日は平成28年3月20日です。市役所、図書館、公民館、学校等で閲覧できるようにいたします。入手は書店での取り扱いとなります。

目次の紹介

はじめに……………	いまなぜ「亀山学」なのか	朴 恵淑
第1章……………	「亀山学」のススメ	櫻井義之
第2章……………	亀山の歴史・産業	
	交通と産業の発展からみた亀山の歴史	香川雄一
	「世界の亀山モデル」の液晶テレビ工場	シャープ株式会社亀山工場
第3章……………	亀山の自然環境	
	亀山の地形・水文・気候環境	谷口智雅・宮岡邦任・朴 恵淑
	亀山の自然環境を守る産官学民の連携	松村直人・朴 恵淑
第4章……………	亀山の生活環境	
	亀山のエネルギー環境・廃棄物対策	山村直紀
	亀山の生活環境をつくるオール亀山ポイント(AKP)	山村直紀・朴 恵淑
第5章……………	亀山の文化・幸福度	
	亀山(関宿)の文化・持続可能な福祉のまちづくり	朴 貞淑
	亀山の幸福度	奥山哲也
第6章……………	亀山の防災	
	南海トラフ巨大地震に備える一過去の震災から何を学ぶか?	川口 淳
	命を守る防災行動と地域観察の視点	水木千春
第7章……………	亀山の国際化・情報化	
	亀山市における多文化共生への展望	水木千春
	亀山の産官学民の連携による国際交流	朴 恵淑・谷口智雅
	亀山の情報発信	若林哲史
	亀山市総合環境研究センター・亀山市民大学キラリ	朴 恵淑・坪田公兒
第8章……………	亀山の地域医療	
	超高齢社会を楽しく生きる	内田淳正
	がん検診を有効に受けるためには	竹田 寛
	市民が健康でいるために	竹村洋典
	シンポジウム「みんなで守ろう! 三重の医療」	
	朴 恵淑・伊藤正明・竹村洋典・佐々木孝治・櫻井義之・今井俊積	

「ノッティーハウスリビング」を訪ねて

名阪国道の中在家インターを降りた所に、地元産の木材にこだわって作った家具と創作置物の販売や木造住宅の設計を営んでいるお店“ノッティーハウスリビング”があります。



店内の展示品と
お店の様子

このお店の会長坂義明氏に“ノッティー”とはどのような意味かをお尋ねしたところ“節だらけの木材”と教えていただきました。なるほど、このお店に展示されている家具類には節のある間伐木材が多く使用されていました。坂氏は山からは多くの間伐材が出材するためこれらを有効に活用することは森林を守ることにつながると述べられていました。森林保全に役立つ製品作りに取り組む坂氏の気概が感じられたため、より詳しくお店のコンセプトや森林保全に直結した林業の現状についてお話を伺いました。

坂氏のお話し 【このお店の母体はお店の傍にある約50年以上続く製材会社である。この製材会社で扱う原木は地元亀山産の木材にこだわって仕入れている。木材の最大の用途は今も住宅材である。以前の日本家屋の外壁や内装表面には多くの木材が使用されていたが、今建てられる一般住宅の外壁や内装に木材が使用することは少なくなり木材の使用量が減ってしまった。また、以前安価な輸入木材に押されて国産木材の出荷量が大きく落ち込んでしまった。そのため、森林の管理が経営的に難しくなり森林の荒廃が進んでしまった。また、地元亀山市内の製材業者の数は2、3軒になっている。日本の森林の大半は人工林であり、常に手入れをしないと森林は荒廃してしまう。しかし、最近“地産地消”の考えが政策的にも反映され、ようやく、少し国産木材の使用比率が増えてきており、国内産木材の使用率は以前約15%程度であったが現在約30%程度まで回復してきている。

建材としての木材の選定は、その建築現場と同じ地域の自然環境（空気、水・土地）で育った木材を使用することが相応しいといわれている。すなわち、地元産の木材を使用することは、そこで暮らす人たちにとって最も相性が良く安心・安全な材料といえる。この様な観点からお客様には地元産の木材を使用した家や家具を提案している。

お店では木材の良さを知って木材に馴染んでもらうために市のイベント等に参加して間伐材を利用した木工教室を開催したりしている。これからも“森からの贈り物をあなたの家庭へ”をキャッチフレーズに、量産製品ではなく木にこだわりのお客様を対象にオーダー製品で地元木材の拡販につなげていく。国産木材製品を買ってもらい、使ってもらうことで昔の元気な山の姿を取り戻す。この様な活動がどんどん全国に広がれば日本の山が変わる。それは世界を変えることにもつながっていくはずである。私たちはこのような夢を持って木に関する仕事に携わっていく。】と熱く語られていました (尾崎末廣)



「かめやま会故の森」 イベント開催！

関町市瀬地区にある「かめやま会故の森」では平成20年度から「歩ける森・遊べる森・育てる森づくり」を目指して、毎年2月と11月に協賛企業の家族や一般市民が参加して広葉樹の間伐作業、遊歩道の整備、植樹など環境整備を実施しています。



植樹（クヌギ）

本年度は2月6日（土）に約220名が参加して遊歩道の整備・植樹・木の実工作・しいたけの菌打ちが行われました。

植樹には15組の親子が参加して、クヌギの苗を1本ずつ森の中に植え付け、鹿の被害を防ぐためにそれぞれの苗をネットで囲いました。主催側の担当者は「この苗がカブトムシやクワガタが住み着くような木になるまで折に触れて森を訪れ、その生育ぶりを見て欲しい」と言っていました。

しいたけの菌打ちでは、最初に県林業技術センターの研究者からキノコについての楽しい話がありました。「日本には約5000種の野生キノコがあり、そのうち名前が付いているのは約2000種で他は名無しの権兵衛です。毒キノコは約200種類あるが1回でも毒キノコと判定されたキノコは永久に食べられるキノコには戻れないため、毒キノコは増えています。キノコの分類を知りたい場合は新しいキノコ図鑑を入手したほうがよい」と述べていました。毎回このイベントでは食べられるキノコの実物を展示してくれますが、一躍有名となった「亀山ラーメン」に入っているヒラタケ・ハタケヒメジ・ハナビラタケなどの鈴鹿のキノコも並んでいました。今回初めて登場したのは相撲力士の大銀杏のような大きなオオイチョウタケでした。

しいたけの菌打ち作業では原木（コナラ：小さいどんぐりの生える木、直径約12cm、長さ約90cm）に電動ドリルで穴を開け、そこへしいたけの菌が付着した種駒をハンマーで打ち込みました。個数は直径の3倍ぐらいが適当とのことです。（概ね1本の原木に30～40個）前述の研究者は「しいたけが出るまで1年半程度かかりますが、直射日光を避けること・雨がある程度当たること・風が通るところ等、保管場所選定や管理が大事である」と話していました。傍らでは木の実工作も行われていましたが老若男女を問わず大変人気で、思い思いの作品を熱心に作っていました。

最後に坂下コミュニティの人達が作られた「キノコごはん」と「キノコ汁」が参加者全員に振る舞われました。（草川喜種）



しいたけ菌打ち



記念写真撮影